

パウロ大塚喜直京都司教への誌上インタビュー 献堂70周年を糧にして、新たに希望を持って歩みましょう



パウロ大塚喜直京都司教

高山右近の列福運動について

司教さまにはお忙しいところありがとうございます。本日のインタビューは、この20年間の振り返ってその思いを存分に語っていただきたいと思い企画をしました。

まずユスト高山右近です。

2014年やまと郡山城ホールでの「音楽と劇で綴る高山右近の生涯」上演。長い間毎年、奈良・榛原で開催されてきた右近子ども祭り。また、フィリピン・マニラへの2度にわたる公式巡礼など京都教区あげて列福運動に取り組んでまいりました。その運動の意義なり、ご感想をお聞かせください

大和郡山教会献堂70周年、心よりおめでとうございます。

高山右近の列福運動において、奈良ブロックの信徒の皆さまが長年にわたり熱心に取り組まれてきたことに、心より深く感謝申し上げます。「右近こども祭り」や、2014年に開催された「音楽と劇で綴る高山右近の生涯」の上演を通じて、右近の生涯は、現代に生きる私たちにとって貴重な霊的糧となり続けています。

列福祈願を込めたローマ巡礼やフィリピン・マニラへの巡礼は、右近の列福、さらには列聖への歩みを力強く後押ししてまいりました。

わたしたちは次なる目標として列聖運動へと歩みを進めます。高山右近の信仰と勇気が、これからの時代を生きる私たちの灯火となりますように。

浦上信徒流配150周年について

当教会で行われた合同堅信式で司教さまは「この流配碑は京都教区ではここだけです」と話され、それをきっかけにして流配150周年祭が動き始めました。プレと本番の2回にわたって記念ミサと講演、パーティなどを開催して浦上からまた

全国から、遺族はじめ関係者が多数参加していただきました。また、大和郡山市でもシンポジウム「大和郡山市と浦上キリシタン」を開催、関心の深まりを感じました。

今後、こうした運動をどのように展開していけば良いかお教えください。

浦上信徒流配150周年記念行事を通じて、大和郡山教会の皆さまが信仰と歴史への理解を深められたことを、心より嬉しく思います。特に、若い世代への信仰継承は今後ますます重要となります。長崎浦上教会や西日本各地の流配先への巡礼をはじめ、大和郡山市との連携のもと、歴史保存活動や文化イベントを企画し、新たな学びと交流の場を創出していきましょう。信徒のみならず、関係者や歴史に関心を持つ多くの方々ともつながりながら、信仰と歴史の灯を次代に伝えていければと願っています。

故教皇フランシスコの来日について

司教さまは故教皇フランシスコの来日接遇チームの責任者としてバチカンとの打ち合わせ等、大変ご苦労されたと聞いています。

日本滞在中のエピソードなどありましたらお聞かせください。

2019年の教皇フランシスコの訪日は、日本のカトリック教会にとって極めて象徴的な出

来事となりました。特に東京ドームでのミサにおいて、教皇が赤ちゃんを優しく抱きかかえ祝福されたその姿は、まるで福音書の中でイエスが幼子を迎え入れ、祝福された場面を現代に生き生きと甦らせたように感じられました。その場に居合わせた人々は、ただその光景を目にしただけでなく、教皇が体現された「愛のまなざし」に深く触れたことでしょう。

わたし自身、教皇訪日準備の責任者として警備チームとの綿密な打ち合わせに携わりましたが、特に印象的だったのは、バチカンの警備方針が「安全を確保しつつ、人々との距離をできる限り縮めること」に重きを置いていたことです。世界各国の指導者が厳重な警備の中に身を置く中で、教皇の警備方針は、教皇が「神の民のただ中にある者」として、威厳といつくしみを併せ持つ方としてお守りすることにありました。

教皇フランシスコが示された「近くにいること」「触れ合うこと」の精神は、決して一過性の感動にとどまるものではなく、むしろこれからのわたしたちの信仰生活において問い続け、形にしていくべき本質的なメッセージであると感じます。

司教年頭書簡について

この20年間、毎年年頭書簡を発表されています。それぞれがその時々時代の背景を反映して書かれたと思います。振り返って、そのうちから

特に心を配ったもの、思い入れが深いものを2、3あげてください。

2001年に「これからの京都教区の将来を考えて」を発表し、共同宣教司牧についての理解を深めることが目的でした。それ以来、年頭書簡の発表が重要な務めとなり、2025年まで続けてきました。教皇のメッセージに沿いながらテーマ設定、構想、執筆から脱稿まで約半年をかけて準備しています。テーマによっては2年から3年かけて掘り下げることもあります。

ヨハネ・パウロ2世教皇の時代においては、「日常からミサを生きる」というテーマのもと、信仰生活の中心にあるミサ(2004-2005)について論じました。また、召命の意味を再考することを目的とした書簡(2009-2010)も発表しました。ベネディクト16世教皇の時期には、「信仰」を主題とした書簡(2011-2012)を著しました。教皇フランシスコの時代には、神の貧しさを体現する教皇の姿勢に共感し、貧しさの霊性をテーマに据えた書簡(2014-2015)を公表しました。

さらに、環境問題に焦点を当てた回勅「ラウダート・シ」(2015)を受け、その後「インテグラルな回心」(2018)についても検討を重ねました。2020年に始まった新型コロナウイルス感染症のパンデミックの中では、生死についての深い省察を促し、終活に関する書簡(2022)を執筆しました。これらの書簡はす

べて、時代ごとの喫緊の課題に対応する形で考察し、信徒にとって信仰生活の霊的なヒントになればと思っています。

高齢化が進む教会について

大和郡山教会は、世間と同じく高齢化が進み教会運営もかつてのような進め方が大変むづかしくなりました。こうした状況下にあってこれからの大和郡山教会はどのような方法で運営していけばいいのか、また望むことを何なりとお話してください

日本社会が少子高齢化という新たな時代を迎える中、教会もこの変化とともに歩んでいます。これはわたしたちがより豊かに成熟し、信仰をいつそう深めるチャンスでもあります。今こそ、若い世代とともに歩む道を拓き、家族全員が心をひとつにできる信仰行事を企画することで、教会の未来に新たな光を灯していきたいでしょう。ご高齢の方や病を抱える方々への訪問、家庭での祈りの支援、そして年齢に応じた霊的な学びの場を整えることで、あらゆる世代が生き活きと成長していけると信じています。オンライン配信など新たなツールを活用するなど、変化の時代にあって、教会はかつてないほど創造的に、そして希望をもって歩んでいけるのです。

ありがとうございました。